２０２２年度　法科大学院

第４期入学試験問題

3 時限

刑法

（論文式）

試験時間 50 分

注意事項

1. **試験開始の合図があるまで、この問題冊子の中を見てはいけません。**
2. この問題冊子の１ページから問題が掲載されています。
3. 試験時間中に問題冊子の印刷不鮮明、ページの落丁・乱丁及び解答用紙の汚れ等に気付いた場合は手を挙げて監督に知らせてください。
4. **解答用紙には解答欄以外に記入欄がありますので、監督の指示に従ってそれぞれ正しく記入してください。**
5. 解答は、必ず解答用紙の解答欄に記入してください。**解答用紙の解答欄以外に記入された解答はすべて無効とします。**解答用紙の裏面を使用する場合は「裏面に続く」と記載してください。
6. 解答用紙は各１枚しか配布しません。複数枚請求されてもお渡ししません。
7. 貸与した六法以外の参照は一切できません。
8. 試験問題の内容等について質問することはできません。
9. 問題冊子の余白等は適宜使用してかまいませんが、**解答用紙の解答欄以外に記入された解答は無効とします。**
10. 試験終了後、問題冊子は持ち帰ってください。

［刑法］

次の事例におけるＸの罪責について論じなさい。

（事例）

Ｖ（平成１９年生）は、平成２６年１１月中旬頃、１型糖尿病と診断され、病院に入院した。１型糖尿病の患者は、生命維持に必要なインスリンが体内でほとんど生成されないことから、体外からインスリンを定期的に摂取しなければ、多飲多尿、筋肉の痛み、身体の衰弱等の症状を来し、糖尿病性ケトアシドーシスを併発し、やがて死に至る。現代の医学では完治することはないとされるが、インスリンを定期的に摂取することにより、通常の生活を送ることができる。

Ｖの退院後、両親（父親Ｆ及び母親M）はＶにインスリンを定期的に投与し、Ｖは通常の生活を送ることができていたが、Mは、Ｖが難治性疾患である１型糖尿病にり患したことに強い精神的衝撃を受け、何とか完治させたいと考え、わらにもすがる思いで、非科学的な力による難病治療を標ぼうしていたＸに、Ｖの治療を依頼した。

Ｘは、Mの説明から、インスリンを投与しなければＶが死亡する現実的な危険性があることを認識しながら、自身を信頼して指示に従っているMに対し、インスリンは毒であるなどとしてＶにインスリンを投与しないよう執ようかつ強度の働きかけを行った。その結果、Mは、Ｖの生命を救うためにはＸの指導に従う以外にないなどと一途に考えるに至り、Ｖへのインスリンの投与ができない精神状態に陥った。その後、Ｖは、多飲多尿、筋肉の痛みを訴える、身体の衰弱などの症状を来したが、Mは、Ｘの言いつけを守り、インスリンを投与せず、またＶを病院に連れていこうとはしなかった。

Ｆは、Ｘの治療法に半信半疑の状態であったが、Ｘは、Mを介して、Ｆに対しても、インスリンの不投与を指示し、Ｆ及びMをして、Ｖへのインスリンの投与をさせなかった。

その後、Ｖの状態は急変し、病院に搬送されたが、糖尿病性ケトアシドーシスを併発した１型糖尿病に基づく衰弱により死亡した。